



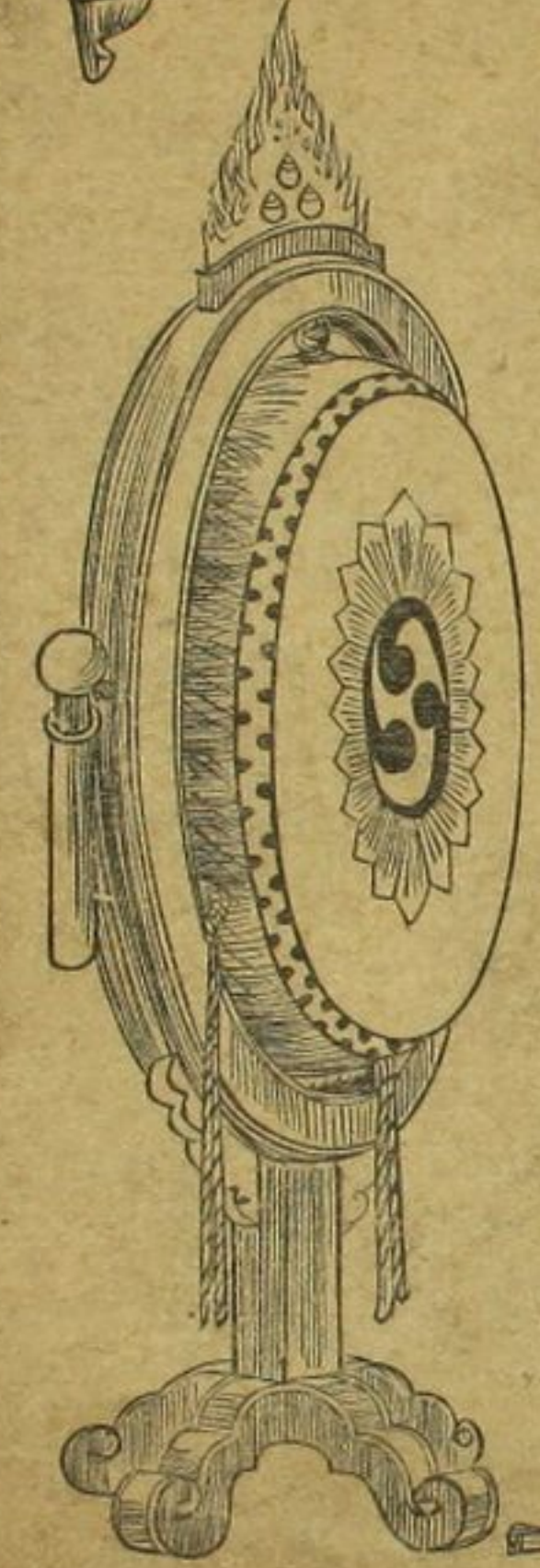
家庭唱歌

岡村増太郎編述

四竈納治撰曲

第一集

普及舎發兌



明治廿一年十一月再版





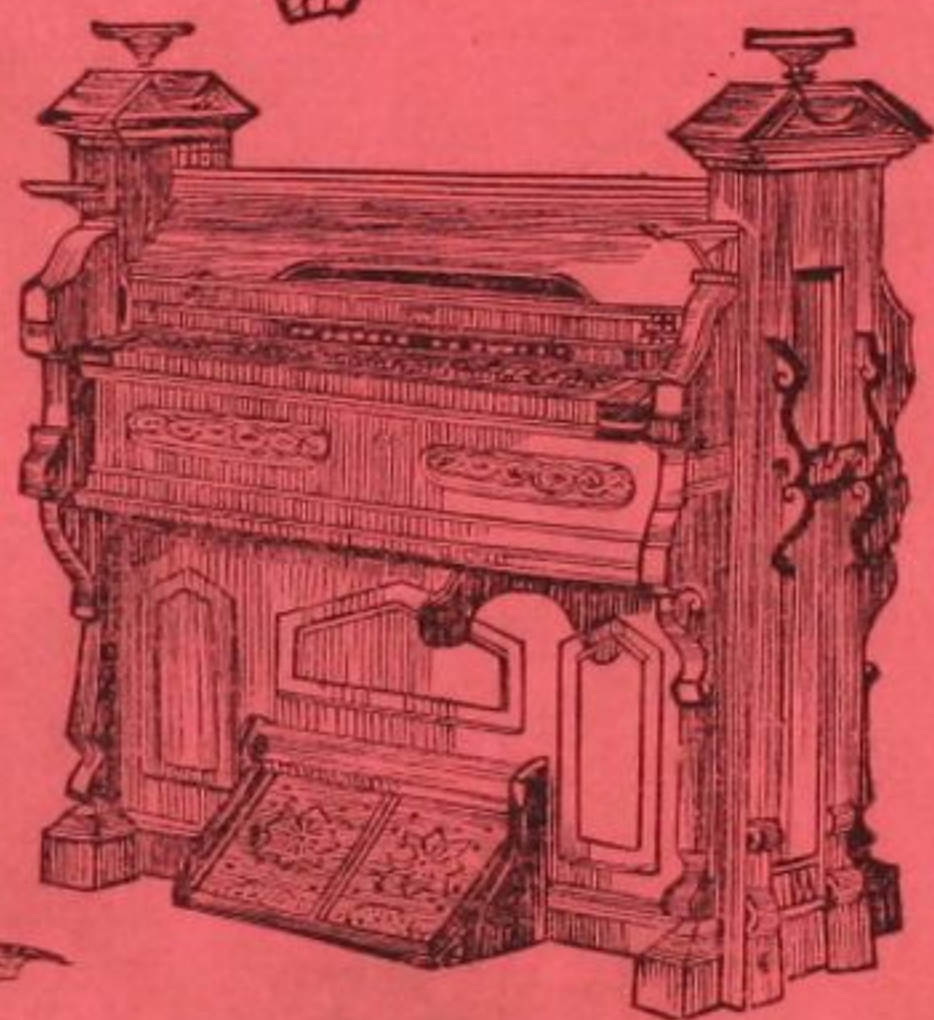
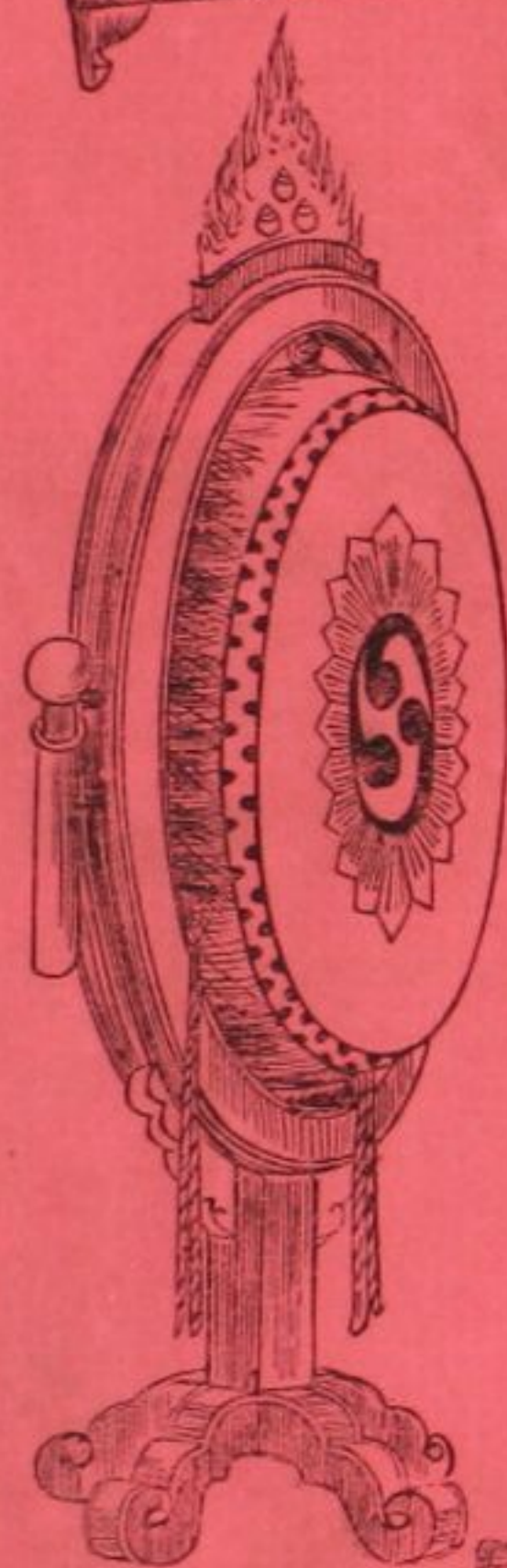
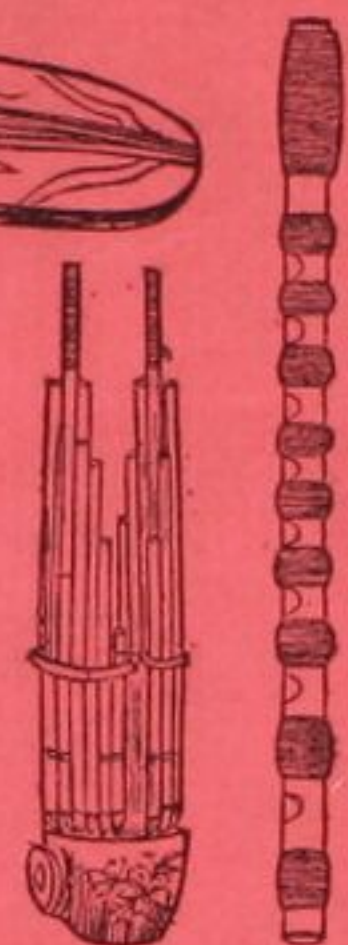
家庭唱歌

岡村増太郎編述

第一集

普及金卷

四電治撰曲



家庭唱歌第一集の序

轉るや支那人も物に本末あり事に始めを
はりあり後れ先だつ所を知れば道に近し
と亦も云ひけりされば風の音の泰西の國
人はしも萬の事物に就きて其の理を窮は
むる思慮に長けたりければ諸の學の術も
本末の方則正しくはじめをはりの順序整
ひたるは言まくも更ふりよ、ろふき兒童
の謠ふ歌にさへれのづから其の順序の整
ひたるは彼國の習慣として然あるべき事
にざりける今はた明らけき御代の惠は久
堅の都をはじめて天放る邊鄙に至るまで
に暗き夜の明け行く如く諸の道々のや、
や、にあまり來ぬる其が中にも彼の西の
國風の業は彌弘ごりにひろごりて萬の事
物にも深く其の理を窮はめて其の本末の
方則をいと正しくし始終の順序をよく整

ふる習慣もをさく出来にける物から猶も幼き兒童を豫きより其の方針に導きて萬の物に順序たる事の状を見習はし聞習はしめんには彼の國ある唱歌の術に據りて誘ひ教ふるを便宜からめとて岡村うじが家庭唱歌てふ書を印本と爲して世にほどあさんと昔の根の懇切に思ひ起ちて余に序文加へてよと請ひ求る隨に其の事の由を一言書き添ふるにかも

明治二十年長月

梅の舎主人識

序

音楽の道は人心を和げ風化を助け教育の上には缺くべからざるものにあそありけれ今は已に全國小學の學科に及ら之を加へらるゝに至りたりされども之を學ぶの道に乏しきに因りて實施の途に困むは歎はしと云はざるを得ず況してや寒村僻地に於きてをや不肖常に之を憂ふるを久し故に今此の第一に庭の訓に尤大切なる守謠や數へ歌等を正し集めて聊舊來の弊を防がんとむ借此等の歌は都鄙の別なく老弱の差なく教ふるとかく學ぶとかく誰しも能く知り且唱へ得る曲にあんありけるされども世にありふれたるハ心も言葉も賤しくして教草とあるべくもればねねバ今其の賤しからぬ歌どもを撰み集めてものしぬ

明治二十年九月

三又漁夫識

家庭唱歌第一集

四竈訥治校閱并撰曲

岡村增太郎編述

一 二 三 四 正 六 小
メ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○



(1) 調 4/4 1 1 3 1 | 3-4 3 | 6-4 4 | 3 3 1 3 | :4 4 3 1 | 7-0-:
4/4 ヒヒミヒ | ミーヨミ | ムーヨヨ ミミヒミ | ヨヨミヒナー

5 4/4 6 7 1 1 | 7 6 4 3 | 6 6 7 6 | 7-1 7 | 6 6 7 6 | 7-0-
4/4 ムナヒヒ | ナムヨミ | ムムナム ナーヒナ | ムムナム ナー

○勸學の歌

福羽美静作

一ツとや。人は心が第一よ〜。

磨いて修めて世をわたれ〜。

二ツとや。再びかへらぬ光陰を〜。

むあしくすごしてむむものか〜。

三ツとや。三ツ四ツ五ツのをさあてが〜。

智識を育つる幼稚園〜。

四ツとや。善き友撰びて交れよ〜。

よき友よき師ハ身の守り〜。

五ツとや。いつまでい〜ども盡せぬは〜。

我が身をそだてし親の恩〜。

六ツとや。昔をわきまへ今を見て〜。

今より開けん世を思〜。

七ツとや。何より大事ハ人の道〜。

人々はげめバ國もとむ〜。

八ツとや。八千代と壽く君が世を〜。

たむくる人あそ人ぞがし〜。

九ツとや。心を修むる學問の〜。

光はさやけしまどの月〜。

十ツとや。とまろは日の本日の光り〜。

普ねき國恩わをるあよ〜。

○愛國の歌

源烈公作

一ツとや。人の國より吾が邦を〜。

治めん事あそはむめある〜。

二ツとや。書讀むとても武士の〜。

心しあくばいかにせん〜。

三ツとや。港をはむめ備へして〜。

皇城の内まで守らん〜。

四ツとや。世に住む民は日本の〜。

深き恵みを仰ぎしれ〜。

五ツとや。いつもかいらぬ我國は〜。

よそよりれくる君ぞあき〜。

六ツとや。葎の宿に住むとても〜。

心にかはる事ぞあき〜。

七ツとや。何をれいても。吾が君とく。

六ツとや。父と母とを。敬まはんく。

八ツとや。八ツに我身は。さかるともく。

五ツとや。赤き心は。世に残れく。

九ツとや。心動かぬ。ものからバく。

四ツとや。みれより強き。備へあしく。

十ヲとや。豊蘆原の。中津國く。

浪はた、せじ。春の風く。

○四季の歌 同

一ツとや。光のどけき。春の日ハく。

千里の外も。うらやかにく。

二ツとや。富士も静けき。夕風にく。

軒端の梅も。かざるありく。

三ツとや。みもそ。川の浪の音く。

涼しさまさる。夕月夜く。

四ツとや。四方の山邊の。賤が家く。

いぶせく見ゆる。蚊遣火にく。

五ツとや。いさごも清く。水澄みてく。

六ツとや。六ツ浦の山の。紅葉バはく。

時雨る、空に。染ぬらんく。

七ツとや。各みその。關の櫻木よく。

花かど見にて。積る雪く。

八ツとや。山のあふたの。炭竈にく。

遠近わかぬ。夕煙く。

九ツとや。心に年月。重ねつ、く。

相逢ふ。あかぞ。頼母敷く。

十ヲとや。常盤の山の。松が江ハく。

千代萬代の。君が友く。

○修身の歌 しかまとつち作

一ツとや。人が一度。よくなさばく。

已ハ百度。百千度く。

二ツとや。書さへ。學べバ。世の中のく。

今や昔の。事を知るく。

三ツとや磨けバまをまを光るありく。
 二ツとや心の魂をそ尊とけれく。
 四ツとや代々に名高き大丈夫もく。
 五ツとや多くは賤しき身より立つく。
 六ツとやいつも撓まず働けバく。
 七ツとや無益に光陰送るあよく。
 八ツとや難儀や苦勞を厭ふあよく。
 九ツとや心は素直に氣は強くく。
 十ツとや外國人にも笑はれぬく。
 人にふれかしよき人にく。

○名所の歌 小田みよし作

一ツとや比良の高嶺の夕間暮く。
 二ツとや積る深雪の面白きく。
 三ツとや二見が浦の波わけてく。
 四ツとや登る旭のれもしろきく。
 五ツとや三笠の山に照る月のく。
 六ツとや影に床しき今昔く。
 七ツとや芳野の山の櫻がりく。
 八ツとやふみや迷はん花の雪く。
 九ツとや五十鈴の川の水清くく。
 十ツとや流れ盡せぬ大御代やく。
 十一ツとや武藏野にさく紫のく。
 十二ツとやゆかりの色ぞあつかしきく。
 十三ツとや七ツとや浪華に咲にし此花やく。
 十四ツとや千代の今日まで香ぐバしきく。
 十五ツとや八ツとや矢橋の浦廻を見渡せばく。
 十六ツとや夕日にかへる眞帆片帆く。
 十七ツとや九ツとや衣の里の小夜砧く。

秋風寒くなりまさるく。
十ヲとや遠つ淡海に架してふく。

瀨名の橋は浪ばかりく。

○四季動物の歌 同人作

一ツとや一夜あくれば鶯もく。

春や來ぬると告てあくく。

二ツとや吹ものどけき春風にく。

御牧の駒ぞ嘶ふあるく。

三ツとや御狩むる野の朝霞く。

ありかしれとや雉子あくく。

四ツとや四方に色そふ青葉山く。

啼音も繁き郭公く。

五ツとや池のさざ波寄る見江てく。

飛びかふ螢の影涼しく。

六ツとや葎茂れる庭面せにく。

虫の鳴音ぞあはれあるく。

七ツとや鳴て夜寒の里遠くく。

衣雁がね渡るありく。

八ツとや山路の紅葉踏みわけてく。

妻や戀しと鹿ぞあくく。

九ツとや小手に霞はたバしりてく。

をの、鷹人狩りくらそく。

十ヲとや遠く鳴海の瀨千鳥く。

かく音ハ潮のしるべありく。

○四季植物の歌 同人作

一ツとや開く垣根の白梅はく。

消残る雪かどまがふまでく。

二ツとや古木の柳も春風のく。

恵みに靡く若緑く。

三ツとや見れば心もあぐがれてく。

家路わをれつ山櫻く。

四ツとやよむる浪かど見るばかりく。

岸の卯の花咲きみだるく。

五ツとや岩根の松の下つゝとく。

十四
 しぐれもしらぬ色に咲くく。
 六つとやむら萩さける野路ゆけばく。
 花摺衣さるばかりく。
 七つとや流れも清く香に匂ふく。
 川上遠く菊やさくく。
 八つとや倭錦の色そはるく。
 紅葉を見れば秋深しく。
 九つとや木の葉ちりかふ朝風にく。
 くもらぬみそらも時雨けりく。
 十つとや友どあさばや吳竹のく。
 雪にも折れぬその姿く。

六つとやむら萩さける野路ゆけばく。
 花摺衣さるばかりく。
 七つとや流れも清く香に匂ふく。
 川上遠く菊やさくく。
 八つとや倭錦の色そはるく。
 紅葉を見れば秋深しく。
 九つとや木の葉ちりかふ朝風にく。
 くもらぬみそらも時雨けりく。
 十つとや友どあさばや吳竹のく。
 雪にも折れぬその姿く。

調 4/4
 6-65 | 6 i 6 5 | 0 3 5 i 6 i | 5-.0 |
 △-△イ △ヒ△イ ミイヒ△ヒイ
 4/4
 1-21 | 2 3 6 5 | 0 1 2 3 1 | 2-.0 ||
 フヒ フミ△イ ヒフミヒフ

○桃太郎

柴の折戸の賤が家に翁と媪が住ひけり。翁は山に薪あり、媪は川に衣濯ひ、日毎くの世渡りもいと浅ましき朝熊山いと開がじき五十鈴川流れ流るゝ水面瀬に流れ來れる桃の實の世に類かく太ければある珍らしと持歸り折敷に据ゑて愛る中、桃はわれからうち割れて男子ふひとり出にける。老の夫婦は驚きつ又悦びつ取上げて桃の中より出たれば桃の太郎と名けつゝ、簪の花と愛でけるに次第に人に成るにつれ、猛しくもまた敏くして翁と媪の高き恩深き恵みに報いんと。鬼ハ時々人里に渡りてにくき舉動を憎しと常に思ふより、黍の團子を糧とふし、犬猿雉子隨從へて、鬼が島わに打わたり、鬼を征討け其島の黄金白銀種々の寶を収め歸り來て、翁と媪に捧げつゝ、豊か

に富める身とふしし親に仕ふるまめ心實にありがたき例あり。鬼てふものハ世にあらず。人たる道にそむきたる心の鬼の醜鬼の邪人を鬼といふ。幼ふ心に善惡をしらせんために傳へたる昔の人のれし一艸。

○猿と蟹

人里遠き奥山の溪間に遊ぶ猿と蟹蟹の持てるは握り飯猿の持てるは柿の核核と飯とを換バヤと猿の迫るに力かく飯を渡して核を取り核をば園に植ゑけるに年たつ程に實を結び色さへ殊にうるハしくみのれるさまは豚むれど蟹の横這拂らず梢に登る術あき空を見上げていたづらに眼を慰むるのみあるを猿は見すまし我儕社得手の業あり其柿を取りて得させん其代にまた我儕にも得させよと云ひさま梢へ攀上り己が氣儘に採り喰ひ蟹には更に與

へねバ蟹は懦弱き身をかみちせめては我にも一ツだに與へよかしと請ひぬるを猿の惜みて澁々に澁き青柿一ツどり擲うちければ蟹の背にハタと當りて背をわられ蟹は不具の身とありて敵うつべき術なくうれへ悲むをりも折尋ね來れる蜂鷄卵搗春等が斯くと聞き憎ツくき猿めが振舞やいでや敵を取りてんど猿の庵に潜みつゝ待とは如何に神からでし猿智慧に一人咲残りの柿も我物と打うぶきつ爐のはたに居寄る折柄燃頻る槽の中より飛出づる鷄卵ハ猿の横顔へパチと逸ぬればたまり兼焼處に藥貼たんとぞその手を蜂はつよく刺をみハ溜らむとあはたしく厨の水に冷ををり瓶に潜みて待つ蟹がいたく其手を銜みけり猿は愈々驚きてみけつまるびつ戸を明て逃る折しも搗臼は棚の上より轉げ落ちむんづと猿を踏敷いてたしおめけりと已が身にふせ罪咎ハ己が身に因果應報まのあたりかへるといへる理を稚兒達にさとせため昔の人の教草

○舌切雀

鄙に翁と媪あり翁が常にいつくしみ飼ふて樂む雀ありある日翁の營業に出たるあどに媪一人洗濯物の糊壺の乾き減りしを只管に雀の所爲と思ひふし其舌切りて放ちけり翁は歸りてよしをき、情なき事してけりど杖にむがりてみ、かしみ雀のありか尋ぬるにみちに雀に行逢ひて見れば昔の飼雀雀踏しつゝ悦びて己がねぐらに伴ひつ最と珍らしき海山のうまさ物どももて來つゝ酒を勧めつもてみせに翁も深く打解けて厚き心を喜びついごまからんと夕暮に暇乞ひして立ちければさらば土

産のしるしまで黄金白銀絹つむぎさばの
 寶を遺りけり。媼は見るより慾と腰杖に張
 りつゝ我も亦寶乞ひ得て歸らんと。先の怨
 みはしらずげに雀を訪ひつ竹葛籠乞ひつ
 せれて歸るさに中は如何ある寶ぞと。蓋
 をあくれば這いかに寶にあらで鬼羅刹
 化生の數々あらはれて媼が邪慾を懲せし
 と。己が幸のみ冀がひ人の歎きを省みぬ。邪
 しま人を戒しむる昔の人の教草。

○花咲翁

昔々そのむかし心直ある翁あり愛でて飼
 ひぬるゑのろを。或日畑へつれゆくに戯
 れ遊ひ地を堀りて餘念なき様見ゆるにぞ
 翁も興じ戯ふれつ。鋤もて其處を堀けれバ
 黄金數多を堀出せ隣に住める腹黒の翁が
 斯と聞くよりもねたみ羨み我もまた寶堀
 りてん犬貸せと強て率きもて畑にゆき一

と鋤れろを手にてたへは腕に金と喜びて猶
 堀り見れば這は如何に金にはあらで石瓦
 いたく腹立はら癒せに犬を直ちにうち殺
 す。直ある翁は之を聞き悲み歎きなきがら
 を松の根元に葬るに其松次第に立榮に太
 るを伐りて春とあし一杵搗けばよね殖る
 二杵搗けば彌増しに殖ると聞て腹黒の翁
 は白を又かりてつけば搗程へる斗り腹だ
 々しさに打碎き心燃に立つ火にくべぬ。直
 ある翁ハ之を見て惡しと思へど堪へ忍び
 せめて灰をど請受てあらふんはしりごよ
 の松枯木も花を咲けかしとほぎつ散らせ
 バ忽ちに枯木に花を咲せけり。餘りの事の
 不思議さに國の領主も賞玉ひ褒美數多を
 賜ひしに心きたる彼の翁又ありずまに
 其灰をみひて枯木に花咲かせ我も褒美を
 貰はんと國の領主の通るてふ道のかたへ

にたゞずみて。詩けバ領主の眼にハいり。供
人等の衣袴穢を不禮を咎めよ。いたくみ
らされ辛うじて。かへりにけりと腹黒く。足
るを知らんで邪まに。振舞ふ人を戒むる。昔
の人の教草

○かちく山

隣も遠き一ツ家に翁と媼と住ひけり。或日
翁は一疋の狸を捕へ歸り來て。今宵の肴に
みれ煮よと媼に誂へ又更に其身は山に出
行ぬ狸は足をからめられ小屋に釣れて力
あく腕たゆげに春ける。主人の媼をあざむ
きて。れバごに代りうせもつき庭の掃除や
水仕事身に引受て務む故。此繩解て助けて
と乞ふを眞言と聞くれぐふ。慙れと思ふ心
より解て助けし恩を仇無慘や媼を打殺し。
衣物前掛剝取りて已れ着替て媼と化け。そ
れのみからず媼が身の肉を屠りて汁に焚

き翁歸らバはませんとせ、ら笑ひて待ぞ
とも神あらぬ身の露白髮翁は歸りて味ふ
に其味ひの異なるを怪しと思ひ尋ねれば。
狸ハ化をあらはして。いち足ふんで逃失ぬ。
翁は驚き泣悔む折しも日頃親しみて馴來
る兎が來掛りつ斯と聞より小跳りし媼の
かたきは某が討てば御心安かれと山に出
行き狸をバ甘く謀りて枯柴の重荷を負は
せ後より火を打かけし音を聞きあれハ何
ぞと問ひければ。わぬししらずやあれ社は。
かちく鳥の啼聲と欺く内に火ハ早く背
に燃つき毛も皮もやかる、狸は狂ひつ、
辛く深山へ逃歸る兎は猶もたばかりて鹹
きひしほに唐がらしねりて火傷の膏藥と。
言みしらへて貼たれば。疵はまをく、い
たみける。かくて兎は木の舟と土の舟とを
造り置き泥にて造りし其舟は彩色畫き色

々の模様美々しくしてければ。或日狸は川
 遊び舟を見るよりいちはやく。我物顔にう
 るはしき彼の土舟に乗り出せ。兎は續いて
 木造りの舟に飛び乗り川中へ狸ををひき
 權をもて狸が乗りし土舟を打バ碎けてあ
 らでふに共に狸も沈みしと。人をあやめし
 其罪は終に我身に報ゆてふ。たとへ事をば
 種として昔の人の教草。

サレゼン ヨマレ アニオト ドモヨ
 マモリニ マモレ キミガ ヨーヲ

調 $\frac{2}{4}$ | 1. 1 3. 3 | 5. 5 5, | 6. 6 5. 5 | 3. 2 1, |

$\frac{2}{4}$ | 1. 1 2. 1 | 6. 6 5, | 1, 6. 5 | 3. 2 1, ||

- (1) 三千餘万兄弟どもよ守りに護れ君が代を
- (2) 劔にかはる炮筒と響きむかへる敵をうちばらへ
- (3) 鏡とぞるはれほくの書物古今に涉り照し見よ
- (4) 玉にも勝る心の光りみがきに磨け撓みかく
- (5) 三千餘万力を協せ守りに護れ君が代を
- (6) あらての風は吹來るとてもへさきにたちて疾くく防げ
- (7) あら浪高く寄來るとてもれもかちどりてとくく走よ
- (8) 霰にみぞれ横ざるとても大平洋のたゝかかを
- (9) 旭に輝く港を占てかんどりかゑよ働けよ

- (10) 三千餘万かんどりかゑよ吾船助けて働けよ



發
兌



編輯兼出版人

撰
曲
者

宮城縣士族

四
竈
訥
治

東京麴町區有樂町
三丁目二番地

東京府平民

岡村增太郎

東京神田區松永町
十九番地

教育書專賣所

普
及

東京下谷區練馬町
十四番地



明治二十年八月二十九日版權免許
同 年十月 出 版
同 年十一月三十日再版御屆

(家庭唱歌第一)

定價金八錢